

時代の転換期における民衆たちの笑いについて ～現代に再生する「ええじゃないか」～

池田 勝

はじめに

「ええじゃないか」はお札降りをきっかけとして、幕末期に忽然と発生し、全国を巻き込んだ、民衆たちによるある種の「お祭り騒ぎ」のことである。「ええじゃないか」発生当時、民衆たちは、物価上昇により苦しい生活を余儀なくされていた。また、政治的にも非常に不安定な時代であった。民衆たちに広がった、言い知れぬ不安や不満が全てを忘れて酒を飲み、踊り、唄う、「狂乱」の「ええじゃないか」の世界へと人々を導いたのではないかと考えられている。

「ええじゃないか」については戦前より研究者たちの興味を引いてきたが、現在に至るまで、主に歴史学の観点から研究がなされている。本稿では「ええじゃないか」を時代の転換期における民衆たちの笑いとして捉え、文化人類学的な視点からのアプローチを試みる。その際、これまであまり研究対象とされて来なかった、様々な形で表現されている現代の「ええじゃないか」についても研究対象とする。本稿の目的は、幕末期の「ええじゃないか」だけではなく、これまであまり研究者たちが取り上げることのなかった、現代における「ええじゃないか」にも注目し、時代の転換期における民衆たちの笑いという文化人類学的な視点から「ええじゃないか」の新しい姿を明らかにすることである。なお、本稿では笑いという語を広義に用い、民衆たちによる逸脱行為としても捉えることとする。

第1章 「ええじゃないか」の概要と先行研究について

(1) 「ええじゃないか」の概要

「ええじゃないか」とは、お札降りをきっかけとした、民衆たちによる、一種の「お祭り騒ぎ」のことである。慶応3（1867）年の7月に現在の愛知県豊橋市で始まったとされ、東は東京、西は四国あたりまで広がったとされている。

「ええじゃないか」の発生当時の社会状況であるが、まず、「ええじゃないか」発生の前年（慶応2年）は全国的に凶作となり、米価が上昇していた。また開国により、日本は欧米諸国と貿易を行っていたが、日本の輸出超過となっており、それに伴い物価が上昇していた。また、貿易の際、金銀比価が日本と外国では異なっており、幕府は金が海外へ流出するのを防ぐため、金貨の品質を落とす改鑄（万延貨幣改鑄）を行ったが、その結果、貨幣の実質的な価値が下がり、物価上昇に拍車がかかった。そして、その激しいインフレーションは民衆たちの生活を圧迫していた。また、政治的にも徳川幕府と薩長のどちらが政権を執るのか分からず、非常に不安定な時期でもあった。このような社会状況の中、民衆たちの鬱積した日々の不安や不満が「ええじゃないか」により爆発したと考えられている。

以上が「ええじゃないか」の大まかな概要であるが、お札降りがどのようにして「ええじゃないか」になっていったかについて以下、高木俊輔の論を参照して概説する（高木1979：12－15）。

「ええじゃないか」にはまず「お札降り」があったが、お札は多くの場合、地域社会の上流階級、富家、商家に降った。「お札降り」がそれらの裕福な家だった場合、家人はそれを吉兆として喜び、隣人や知人などに言い広め、家の前に仮社殿や神棚などをつくりお供え物をし、お祝いに来た人々に酒食の振る舞いをした。来客をもてなす一方で、家人は商売や仕事を休むことになり、奉公人や手伝い人などに「暇」を出した。休暇を得た者たちは他の降札のあった家に行き、酒肴の振る舞いを受ける。次第に酔っぱらいが増え、お祭り気分になった者たちが、華やかに飾り立てたり、扮装をこらしたりし、町場へ繰り出す。老人は若者に、男は女に、女は男に、といった変装が多く見られ、民衆た

ちは日々の鬱屈した気分とはうって変わって、「ハレ」の意識の中で、「ええじゃないか、ええじゃないか」あるいはそれに類似した言葉ではやしたて、踊り出した。

どのように狂乱状態になっていくかは、地域の条件によって左右された。一般に、都市化が進行して領主規制の弱い所ほど、「ええじゃないか」は狂乱の度合いを強め、アナキーな様相を示し、村落の共同体的一体感の強い所では、「ええじゃないか」の踊りに至らなかつた所もあった。

一言に「ええじゃないか」と言ってもその状況は地方によって大きく異なっている。本稿では「ええじゃないか」の全国で共通することや特に重要であると思われることに注目して論じていくこととする。

(2)「ええじゃないか」における先行研究—倒幕派の関与についてと「ええじゃないか」と「おかげまいり」の関連について

「ええじゃないか」についての研究は戦前より行われてきたが、当初より議論されたのは、倒幕派が「ええじゃないか」にどのように関与し、政治的に利用したかについてと、「ええじゃないか」と「おかげまいり」の関連についてである。

まず、倒幕派の関与についてであるが、当初、倒幕派が積極的に「ええじゃないか」に関与していたという説が論じられてきたが、現在は遠山茂樹が、以下で述べているような説が有力視されている（遠山 1948：266）。

倒幕派の志士は、折から京都に波及した「ええじゃないか」の乱舞を利用しあるいは助長して、自らの運動を意識的に幕府の探索から、そして恐らく無意識的に階級的本能をもって、人民の眼から隠蔽して、自己の政治活動の利益を計ったのであろうと。

また、矢野芳子も以下のように述べている（矢野 1981：318 - 319）。

ええじゃないかでは、その政治・社会的影響力がまず問題になるが、倒幕派の策

動によって起こされた、すなわち、民衆を政治情勢から疎外するために意図的に作りだしたものであるという見解よりは、幕末維新変革に直接かかわってゆくための指導勢力を持ちえなかった民衆自身の不満・不安の表現であって、倒幕派は一部の地域でそれを利用・助長した可能性はあるという見方の方が現在のところは支配的である。

なお、田村貞雄は「大部分の御札は、民衆が自分の家から持ち出したものである(田村1987:208)」としている。

続いて、「おかげまいり」と「ええじゃないか」の関連について論じる。「おかげまいり」とは、「神異や奇瑞を発端とした伊勢神宮への群参のこと(高木1979-215-216)」であり、江戸時代を通じて周期的に発生している。「ええじゃないか」と「おかげまいり」は同一のもの、あるいは、「ええじゃないか」は「おかげまいり」の変形であるとされてきた。これに対し、藤谷俊雄は、『『ええじゃないか』と『おかげまいり』は趣きを異にしているにもかかわらず、多くの論者は両者を同一の歴史現象として区別せずに論じている(藤谷1968:121)』と指摘している。現在では、「ええじゃないか」について分析する際、「おかげまいり」の以外に地方ごとの祭や民衆運動にも目を向ける必要があると考えられている。「ええじゃないか」に先行するものとして伊藤忠士は、「御鋤百年祭」について論じている(伊藤1995:12)。また、高木俊輔は「ええじゃないか」が「豊年踊り」「稲荷踊り」「砂持ち」「残念さん」参りなどの民衆運動の流れの上にあることを指摘している(高木:1979-215)。「ええじゃないか」は「おかげまいり」の伝統を引き継ぎつつも、全国へと広がってゆく過程において、それらと関連を持ちつつ「ええじゃないか」へと変化していったものであると推測される。

第2章 現代に伝わる「ええじゃないか」

(1) 映画、小説の分析

ここでは、1981年に公開された今村昌平監督の映画「ええじゃないか」と2005年に書かれた、宗田理の小説『ええじゃないか17歳のチャレンジ』に関

して、歴史上の「ええじゃないか」がどのように解釈され、そして描かれているか、分析を試みる。

まず映画「ええじゃないか」についてであるが、物語は慶応二年の夏、江戸の東両国に始まる。主人公の源次は舟が難破したところをアメリカの船に助けられた。その後、六年をアメリカで過ごしてこの度、村に戻ってきた。芸人やスリ、「乞食」たちが暮らす東両国で源次は、薩摩藩とつながりを持ち、一帯を仕切る金蔵の下で一揆を先導し、煽ったりしつつ生活していく。やがて町にお札降りがあり、「ええじゃないか」が巻き起こるが、「ええじゃないか」の先頭に立っていた源次は鉄砲隊に打ち殺されてしまう。

以上があらすじであるが、この映画では、人々がお経を唱えながら、御碗を持って米屋に殺到するなど、史実通り、物価が上昇して民衆たちが苦しむ姿が描かれている。源次自身も必死に開墾した土地を奪われるなど、社会の理不尽さを痛感させられる姿が描かれている。このような民衆たちの鬱積した不満が人々を「ええじゃないか」に導いたと表現されている。

続いて小説であるが、高校生たちが仲間と共に現代に「ええじゃないか」を復元しようと奮闘し、全国から多くの人々を最終させた「ええじゃないか祭り」を開催するという物語となっている。この小説では、現代が開塞感のある時代であると描かれ、このような現代を幕末になぞらえ、江戸期の「ええじゃないか」の民衆たちが「世直し」を期待して踊っていた¹のと同様に、現代においても若者たちが「世の中が変わるかもしれない」という期待を込めて「ええじゃないか祭り」を開催する姿が描かれている。

(2) 「ええじゃないか豊橋 豊橋まつり」

① 「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」の分析

愛知県豊橋市は平成18年(2006年)に市制100周年を迎えたのを機に豊橋市が発祥とされる「ええじゃないか」を町興しのキーワードとした。豊橋まつりにおいて、「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」と「ええじゃないか」の衣装をした人々が「歩行者天国」となった道路を行進する「パレカ」が「ええじゃないか」をテーマとした大きなイベントとして2006年より導入された。

第55回豊橋まつりが平成21年10月17、18日に行われたが、筆者はこれを調査した。調査対象は、「ええじゃないか」をダンスで表現する「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」と人々が「ええじゃないか」の扮装をし、「歩行者天国」となった道路を行進する「パレカ」である。この二つが最も「ええじゃないか」に関係の深いイベントであり、豊橋の人々が「ええじゃないか」をどのように捉えているのかに注目し、調査を行った。まずは以下で「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」について記述する。

このイベントはコンテスト部門とノンコンテスト部門に分かれ、コンテスト部門はさらに一般部門、ジュニア部門、マツケンのええじゃないか部門に分かれる。この中で最も重要であると思われるコンテスト部門の一般部門を調査した。

まずは参加資格と審査基準であるが、年齢制限はなく、1チーム5人以上で、演技時間は5分以内である。ダンスの種類は自由でどんなパフォーマンスをしてもかまわない。曲に「ええじゃないか」というフレーズを必ず入れなければならないが、演技者の発声でもよい。曲に関してはモデル曲でもオリジナル曲でも使用できる。審査基準は、当日の司会者によると、「ええじゃないか豊橋」をどれだけ表現できるか、理解できているか、どれだけ「ええじゃないか度」が高いかによる。「ええじゃないか度」とは、どう表現するかのテーマ性、他のチームと一味違う演技、衣装の斬新さをどう出せるかの独自性、構成の巧みさなどの技術力を総合したものである。審査員は、豊橋ふるさと大使の菅原浩志氏ら三名で、演技終了後の審査員のコメントを聞くと技術面よりも楽しそうに笑顔で踊るかがポイントのように思われる。

参加したのは全19チームで、参加者は小中学生、高校生、大学生、社会人と幅広い年齢層が参加し、男性よりも女性の方がかなり多かった。衣装は、美しい花柄をあしらった着物、はっぴ、浴衣など、伝え聞く「ええじゃないか」の華やかな服装を現代風にアレンジしたと思われるものが多かった。その一方で「ええじゃないか」に特徴的な男装、女装は、特に見られなかった。顔にペイントを施す演技者が多く、顔を白塗りにした男性もいた。持ち物としては鳴子あるいは扇子を持つ演技者が多く、楽器類などの小道具としてはお面、太

鼓、旗、番傘、幕、獅子舞、纏、提灯などが使われていた。ダンスは、両手を上に挙げる振りなどの盆踊りの要素を入れつつ、現代的なダンスとなっているチームが多かった。

次に、各チームが「ええじゃないか」をどう表現していたかについてであるが、「ええじゃないか」をどう表現するかにおいては特に規定がないため、それぞれのチームが独自の「ええじゃないか」を表現していた。豊橋への地元愛を「ええじゃないか」で表現するチームを始め、アロハの心を表現するチーム、「平和と明日へと続く未来を祈る」というメッセージを述べ、沖縄風の音楽を使用して「ええじゃないか」を表現するチーム、テーマを「漢」とし、力強く「かぶき者」を表現するチームなど、自分たちの表現したいもの、主義主張を「ええじゃないか」に込めるチームもあった。

このコンテストは寸劇やナレーションを入れるなど、かなり自由度が高いものであった。コンテスト中に司会者が発した、『「ええじゃないか」は全てを肯定し受け入れる』というコメントがこのコンテストのコンセプトを表しているように思われる。「ええじゃないか」を表現するのに細かな規定を設けるのはナンセンスということであろう。

②「パレカ」の分析

「パレカ」とは、豊橋まつりの会場にて無料で配られていた『ええじゃないか豊橋 豊橋まつりガイドブック』によると、「パレード&カーニバル」を縮めた豊橋まつり独自の言葉で“ええじゃないか”と“お面”を題材にした一大行進である。交通規制により「歩行者天国」となった道路に、マーチング、パトントワリング隊やみこしパレード、民謡踊りの隊などが行進をした。その中でも「まちのパワー全開グループ」と呼ばれる集団は装飾車両を先頭に「ええじゃないか」の音楽に合わせて踊り、唄いながら行進していた。

先頭車両のトラック側面には「ええじゃないか豊橋」と大きく書かれ、太鼓や音響設備が搭載されている。後方の一段高い場所では華やかな着物を着た女性と顔を白塗りにした男性が音響や太鼓の音に合わせて「ええじゃないか」の唄を唄ったり、参加者や観客を煽ったりしていた。参加者の先頭は若い女性6

名で鮮やかな踊りを披露していた。続いて「ええじゃないか豊橋」と書かれた横断幕を持つ女性がおり、その後ろには両手にばちを持ち、顔を白塗りにし、派手な着物を着た豊橋商工会議所の人々が踊りながら前進してきた。番傘や大きな団扇、幟を持つ男性もいた。その後ろには、昨日行われたダンスコンテストの参加者など幅広い年齢の数百人が思い思いの衣装で行列に続く。

曲の冒頭は、地理的な意味で日本の中心にある豊橋から「ええじゃないか」を西に東に広げ、東西の架橋になるといった内容の歌詞になっており、参加者たちは前列から順番に「ウエーブ」をする。これは幕末期の「ええじゃないか」同様、「ええじゃないか豊橋」が全国へと広がるようにイメージされたものであると思われる。唄の歌詞については、変化の激しい世の中において、希望を持って明るく生きるといったメッセージが込められている。また、「と・よ・は・し」と合いの手が入るが、地元愛の表現が見られる。踊りについては盆踊りに近いと思われるが、飛んだり跳ねたりへの振りが多く、より躍動感がある。

「パレカ」では、「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」も同様であるが、「ええじゃないか」の華やかな部分を強く表現していた。これは観客たちの目を引くという意図もあったと思われるが、参加者たちが美しい衣装を着て白塗りなどの化粧を凝らし、音楽に合わせて楽しそうに踊る姿はまさに「ハレ」の日の民衆たちであったと言えるだろう。気分が高揚した状態で自分たちの願いや主張を「ええじゃないか」に乗せて表現している点は江戸期の「ええじゃないか」に通じるものがあつたと考えられる。

第3章 時代の転換期における民衆の笑いについて

(1) 「ええじゃないか」の境界性

「ええじゃないか」は、日本史上における重要な時代と時代の境界に発生したものである。以下、その点に注目し、分析を試みる。

エドモンド・リーチは境界に関して以下のように述べている (Leach1981: 33)。

物事や行為を他のものから一つの部類に区別するために、私たちが（言語的あるいは非言語的な）象徴を使う時、「自然の状態」では切れ目なく続く場に人為的な境界を創り出す。

また、リーチが本来切れ目のないものに人間が切れ目を入れてできると述べた、境界に関連して、ターナーはファン・ヘネップが、「通過儀礼は分離儀礼、過渡儀礼、および統合儀礼に分析される（ヘネップ 1977：9）」としたことを受け、儀礼について以下のように述べている（ターナー 1981：210）。

はじめの分離の局面では、個人か集団にいずれかが、象徴行為を通じて社会構造上で占める定位置とか固定した文化条件（「状態」）から離脱してゆく。中間の境界段階になると、儀礼の主人公（「通過者」「境界人」）はどうにも分類のできない、どっちつかずの状態になる。そこで主人公が、これから就く新たな地位の属性とも、以前の地位の属性とも関係ない、象徴に富んだ境域を通りぬけてゆく。最後の局面では、移行が完了した結果、儀礼の主人公が新入りとして、ほとんどの場合、以前より高い地位へ昇格するというかたちで社会構造のなかへ統合される。

ターナーは儀礼の主人公が社会構造上で占める定位置とか固定した文化条件から離脱し、あいまいな状態の状態になる、境界性の属性について独自の論を展開しているが、以下で詳しく述べていく。

ターナーは境界性について「二つの位置のあいだで地位が移り変わってゆく中間点のこと（前掲書：218）」とした。また、境界状態においては「ふつう秩序を形づくる分類体系が破棄されてしまって意味をもたなくなり、そのかわりに他のシンボルが用いられて、日常の行動規範や認識のルールからの二律背反的で一時的な遊離が示される様になる（同 267）」という。さらにそのような、「さまざまな範疇のあいだのどっちつかずの境界状態において、人々の関係にコミニタス性が顕著に現れることが多い（前掲書：268）」と述べている。ターナーの言う「コミニタス」について、その特徴を以下、引用してまとめる。

- ・ コミュニタスとはまずもって自発的、直接的、具体的なものであり、規範によって形成されず、制度化されることのないものである(前掲書:268)。
- ・ デイヴィット・ヒュームが平等的な『人間観』と名づけた、全体かつ直接的な人間関係の希求をあらわしている。言いかえるなら、個々人の独自性を損なうことなく、真の共通性を認識してゆこうとする関係のことである(前掲書:268)。
- ・ コミュニタスとは、人々がお互いに「あるがまま」交流しあい、地位一役割にもとづく特徴をはぎとられて裸のまままで対面しあう状況のことである(前掲書:312 - 313)。

幕末に発生した「ええじゃないか」は、民衆たちが時代と時代の境界でどっちつかずの曖昧な状況に置かれる中で発生したものである。「ええじゃないか」は、民衆たちが新しい時代の到来を予見し、本来、連続的である時代の流れに、意識的あるいは無意識的に切れ目を入れて発生したものと捉えられるのではない。「ええじゃないか」の民衆たちは、時代と時代の境界というあいまいな状況の中で異形な格好で踊り、唄い続けた。

ターナーによると「コミュニタス」の担い手は、同時に複数の集団に帰属している外国移民、二世、混血などの「周縁人」や社会の底辺に位置するような人々であるという(前掲書:211 - 215)。社会的弱者であった「ええじゃないか」の民衆たちは様々な日常の規範から解放され、ターナーの言う「コミュニタス」の状況の中、打ち解けあった人間関係を構築していたのかもしれない。

(2) バフチンのカーニバル論から見た「ええじゃないか」

バフチンは『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』の中で中世およびルネッサンスの民衆の笑いの文化を分析しているが、本稿では、その中のカーニバルの笑いに注目して論じていく。

バフチンはカーニバルに関して、「公式の祝祭に対立しつつ、カーニバルは広く世を支配している真理と現存社会機構からの一時解放や、階級秩序・関係、特権、規範、禁止などの一時的破棄を祝うものであると言えよう。カーニバルは<時>の真の祝祭であり、生成、交替、改新の祭りであったそれはあら

ゆる恒久化され、完成されたもの、終わったものに敵対した。カーニバルは完成されることのない未来をうかがい見ていたのである（バフチン 1988：16）」と述べている。

以下、バフチンの言う、カーニバルの笑いの性質について要約し、番号をつけてまとめる（前掲書：17 - 18）。

- 1：祝祭の笑いである—何らかの個々ばらばらの（おたがいに切り離された）《笑うべき》現象に対する個人的反応ではない。
- 2：祝祭の笑いである—すべての人が笑い、《俗世界》の笑いである。
- 3：普遍的である—万物、万人が対象となる。全世界がおかしな世界になり、その滑稽な様相において、その陽気な相対性において全世界が感得され理解される。
- 4：両面的価値をもつ—陽気で心躍るものであるが、同時に嘲笑し笑殺する。否定し確認し、埋葬し再生させる。
- 5：笑っている者自身もこの笑いの対象となる—民衆は生成する全世界の除外例ではない。民衆も未完成であり、やはり死に、再生し、改新されるのである。民衆の両面価値的な笑いは、生成する全世界の観点を表現しており、笑う者自身がこの世界の一員なのである。
- 6：特殊な世界観、ユートピア的世界、より高きものを目指す動きを有する。

バフチンは「祝祭は、その歴史的な発展のすべての段階で、自然、社会、人間の生活における危機的な、変革の時機と結びついている。死や再生、交替と革新の時機は常に祝祭的世界観へと導いたのである（前掲書：15）」と述べているが、「ええじゃないか」は、まさに徳川幕府の支配する社会が崩壊し、明治、近代化社会という次の段階へ世の中が大きく転換しようとしている最中に忽然と生まれた民衆たちの祝祭的状况である。「ええじゃないか」において民衆たちは、一時的ではあるが「自由」を手に入れた。身分も社会秩序も崩壊した世界の中で民衆たちはみんな、ごちそうを食べ、酒を飲み、唄い、踊り、ふれあい、笑い、そしてバフチンの言う、「ユートピア的世界」を想像した。

日本史上における、重要な社会の転換期である、幕末において、民衆たちの笑いは昇華したのではないか。

(3)「ええじゃないか」の本質について

1でふれたが、「ええじゃないか」は、儀礼空間に通じるものだったと考えられる。実際に男性の女装、女性の男装といった文化コードの転換、無秩序状態の中での馬鹿騒ぎなどの共通する特徴を持っている。儀礼における男性の女装、女性の男装に関して、山口昌男はパプアニューギニアのセピック地域に住むイアトムル族のナヴェン儀礼を例に以下のように述べている(山口1986:27)。

この儀礼においては、男が女の立場に移行するばかりではなく、女が男装する行為が組み込まれている。(略)ここで見られるのは男と女の役割転倒、別の言い方であればアイデンティティの交換である。この社会において、特にナヴェン儀礼においては、男性が圧倒的に優位を占めるために、女性にも儀礼の枠内で華やかな役割を演じさせるという説明が、この衣装倒錯のある側面を説明することに役立つであろう。

儀礼の社会的な役割については、儀礼において一時的に日常とは違う社会的な役割を担うことにより、日常の社会的地位をより強く認識し、秩序を守ることが挙げられる。また、山口昌男によれば、人々の想像力を解放する面もあるという。以下、要約する(前掲書:28)。

儀礼は、言い換えれば、人間をより強い定型の行為に導くことによって、より広い創造力の世界に解放し、社会の表層から一時脱出させて、別の存在として生きることを許す機会をあたえる制度ということができよう。

儀礼と同じく、「ええじゃないか」は民衆たちの想像力を解放するものだったのかもしれない。「ええじゃないか」における男性の女装、女性の男装は、

日常とは違う空間であることを視覚的に示すと同時に男性も女性も関係ない自由な理想的世界を創造し、一時的にその世界を生きたことの表れなのかもしれない。

「ええじゃないか」の本質が何であったか。この問いに「ええじゃないか」を時代の重要な転換期に発生した民衆たちの笑いであると捉えた時、その本質はバフチンが述べたところの「ユートピアイメージ」であると言えるであろう。

カナダの外交官であり歴史家E・H・ノーマンは、古代、中世ヨーロッパの舞踏病と比較して「ええじゃないか」をマス・ヒステリア（大衆狂乱）として捉えている。両者の関連について以下のように述べている（ノーマン 1986：179）。

第一に、中世ヨーロッパでは舞踏病の突発は、たしかに日本とは異なった形をとりながらも、社会緊張と崩壊の時期と符合して起こっていると思われること、第二に、社会の圧力に圧倒された、あるいは社会の解体する重みに打ちひしがれた人心に、一種の解放をあたえたこと、である。

また、「ええじゃないか」を「民衆が大衆運動の形で、ある目標を本能的に手探りしている形（前掲書：180）」として解釈し、以下のように述べている（前掲書：179 - 180）。

幕末の数年間には漠然とした、しかも深い不安が存在した。—それはよりよい生活への憧れであり、現在の苦難と幻滅から逃れて、お蔭参りのような排け口に一時的忘却をもとめようとする欲求であった。一八六七年の例は多くの大衆的なはやし文句や反復句をともなったが、それは社会的、政治的にはたしかに付帯的な意味を暗示していた。そのかけ声や唄は新しい時代の到来を予見しているように思われ、事実、ときにはひそかに徳川幕府の悪政をあざけり、西方諸藩がやがて突撃に移ろうとするのをよろこんでいたのであった。

「ええじゃないか」発生当時、民衆たちは、政治的に不安定な状況の中、苦しい生活を余儀なくされていた。そうした中で民衆たちは新しい時代の到来を予感していた。そしてそれは笑いと本質的に結び付いたのではないか。笑いに関して山口昌男は以下のように述べている(山口1993:73-74)。

笑い、特に嘲笑が、何故豊饒儀礼と結びつくか。それは、笑いが、「静止」に対する「動く」状態に本質的に結びつくからではないか。笑いにおける動は、そのまま「移行」の観念につながる。儀礼が常に宇宙的な性格を持つこと、そして季節の変わり目に集中することを考え併せるなら、笑いのコスモロジカルな意義もまた明らかである。即ちそれは「死すべきもの」を彼方に追いやり、「生成するもの」の出現を促進する。嘲笑そのものも、基本的に対象を変貌させるという機能を持つはずである。ここでは嘲笑の対象も積極的な意味をもつ。それはこの世界を脅かすものの形象化である。生に対してネガティブなものに形を与えることは、とりもおさず、それを生にとり込む行為に他ならない。それ故祭式的な空間にあって、「生」と「死」、「泣く」と「笑う」という日常生活において、相反するものが、「生成」の二つの側面として統一的に捉えられるのである。

山口昌男の論にしたがえば、笑いが時代の転換期に結び付くのは、笑いが本質的に古いものから新しいものを生み出す性質があるからであると言える。そして笑いは「生まれ変わりたい」という人間の本質的な欲求の表れでもあると言えるだろう。それが集団となった時、「ええじゃないか」のような民衆たちの笑いのエネルギーが爆発するのである。

新しい時代の予感を感じ取った民衆たちは、意識的にはあるいは無意識的に、本来連続的な時代の流れに切れ目を入れた。時代と時代の境界に発生した儀礼空間のような非日常的な「ええじゃないか」の世界において、民衆たちはみんな一緒になって踊り、唄い、そして笑った。限定的な時空であるにせよ、ターナーが「コミュニタス」と言ったような身分秩序が崩壊した世界の中、根源的な人間関係を構築し、みんなでバフチンの言うような「自由な未来」を想像した。これらの「ええじゃないか」に関する解釈は、やや抽象的

であり、必ずしも客観的な根拠に基づくものではないかもしれない。しかし、「ええじゃないか」の自由な臨場感については論じることができ、本質の一端にアプローチできたのではないだろうか。

第4章 考察 — 現代に再生する「ええじゃないか」—

(1) 事例、映画、小説、豊橋まつりの考察

第2章では現代において表現されている「ええじゃないか」について、「ええじゃないか」のどういう部分に注目し、どう捉え、イメージし、そして表現しているかについて論じたが、ここではそれらの考察を述べる。

まず映画では、社会の弱者である民衆たちの生活に焦点を当てられ、時代の転換期における、民衆たちの心の叫びを「ええじゃないか」の中に表現している。民衆たちの欲望や願いといった心情に注目し、「ええじゃないか」を表現しているところに独自性があると考えられる。

小説では、行き詰まりを見せる現代において、幕末期に若い志士たちが時代を動かしたように、若者たちに明るい未来を切り開いてほしいという「未来への希望の象徴」として「ええじゃないか」が表現されている。宗田理は「ええじゃないか」に強い「革命性」を待たせ、それを若者たちが成し遂げると表現しており、その点に独自性が見られると言えるだろう。

「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」「パレカ」では、参加者たちが華やかな姿で楽しそうに「ええじゃないか」を表現していた。ただし、観客が演技者と一緒に唄を唄ったり、手拍子を入れたりなどといった一体感はほとんど感じられなかったように思われる。そこは、幕末の「ええじゃないか」とは全く異なる点である。

「パレカ」に関しても「パレカ」参加者と一緒に手拍子をしたり、掛け声をかけたりする観客はいなかった。また、混雑した場所では決められた所より前に出ないように警備員に注意された。

「パレカ」ではまつり会場という限られた社会空間の中、道路交通法など様々な制約、規定のある中で「ええじゃないか」を表現していた。

4章で取り挙げたバフチンが述べたように、中世やルネッサンス期のカーニ

バルは現代においては失われている。それと同様に、現代日本の、豊橋で新たに作られた「ええじゃないか」でも、社会的な地位を越えた非日常の世界で共にユートピアを創造するという、民衆たちの笑いは失われている。

森下伸也は、中世ヨーロッパにおける愚者の饗宴とカーニバル（謝肉祭）に関して「愚者になる自由、愚者となって根源的自由を経験し想像する能力は、近代合理主義の圧倒的力によって封殺され、笑いの想像力はひどく萎縮してしまったわけである（森下 2003：125）」と述べているが、近代合理主義の行き着く先にある現代はまさに社会に縛られ、笑いの本来の「形」を封印された時代だと言えるだろう。「パレカ」ではこうした状況下で「ええじゃないか」が表現されていた。

「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」、「パレカ」は町興しの一環として開催されているものである。したがって人を多く集め、世間の注目を集めるためのショー的な要素があり、「ええじゃないか」における華やかな部分が強調されている。それゆえに参加者と観客の区別が明確である。また、筆者が豊橋まつりで調査を行った際、「ええじゃないか」とはそもそも何かを知人に尋ねている女性を見かけたが、主催者や参加者と観客の間、あるいは個人によっても「ええじゃないか」についての解釈は異なっていると思われる。また、祭会場という限られた社会空間において開催されたものでもあり、幕末期の「ええじゃないか」の「狂乱」とは大きく異なったものであると言えるだろう。

しかし、「ええじゃないか豊橋ダンスコンテスト」や「パレカ」の参加者や主催者たちは「ええじゃないか」からみんなで唄い、踊って「社会のさまざまな困難を打ち破ろう」というメッセージを抽出している。また、幕末と同様に豊橋から「ええじゃないか」を発信し、全国へと波及させたいという思い、あるいは豊橋の明るい未来といった地元愛などを含めつつ「ええじゃないか」を表現している。

幕末期の「ええじゃないか」はその多くにおいて、民衆たちが自分たちの手でお札を降らせて始まったものであると考えられている。これに対して現代における豊橋まつりの「ええじゃないか」は公的な機関が始めたもので、始まってまだ数年しか経過していない。

そもそも、幕末の「ええじゃないか」と現代の創造された祭としての「ええじゃないか」を比較する意味があるのか、といった根源的な疑問が生じるのも当然であろう。しかし、時代の転換期という意味では、共通する部分もあり、そこに比較の可能性があると考えられる。次節で、その点を考察したい。

(2) 時代の転換期における民衆の不安と「ええじゃないか」について

現代の人々が表現する「ええじゃないか」に関して、ここで注目したいことは、2005年頃から「ええじゃないか」に関するものが多く世に出ていることである。豊橋まつりの各「ええじゃないか」関連のイベントは2006年に豊橋市制100周年を機に導入されたが、ほぼ同時期に「ええじゃないか」に注目した社会現象が起きている。音楽の世界では2005年から2007年にかけて「ええじゃないか」というタイトルの楽曲が多く発売されている²。これらの楽曲は概して、時に猥雑な表現をあえて用いつつ、現代の世の中に対する鬱積した不安を吹き飛ばし、みんなでよい世の中になるよう願おうという内容である。

また、富士急ハイランドでは2006年に「ええじゃないか」という名前のジェットコースターが誕生したが、これは前後左右上下と激しく回転するものである。人々は「ええじゃないか」という語感のユーモラスさやみんなで目茶苦茶になって楽しむといったイメージを抱いているように思われる。

「ええじゃないか」に関する現象が立て続けに発生していることは、「豊橋発『ええじゃないか』、時代変化の兆し？」という見出しで2006年10月22日に朝日新聞にも取り上げられているが、これらの現象がほぼ同時期に世に出て来たのは偶然と言えるのだろうか。近年の日本は先の見えない不況の中、経済はもちろん、政治、教育などあらゆる社会概念が行き詰まりを見せ始めていると言えるだろう。現代はそれらを乗り越えうる新たな社会的概念を模索している途中の言わば、時代の転換期に立たされていると言えるのかもしれない。それが事実か否かは現在のところ知る術はなく、また現代は時代の展開、移り変わりが早く、常に時代の転換期と呼べるような状況が訪れていると言えるかもしれない。しかしながら、現代において人々が未来への言い知れぬ不安を抱えているのは事実であると言えるだろう。そうした状況の中、「ええじゃないか」

の気運が高まっているのかもしれない。

人間が抱く不安に関して、池井望は、生まれてからの学習や経験によって生じる不安と区別して、動物種に生得的な不安を《原不安》と名づけて論じている。以下、引用する（池井 1985：218）。

《原不安》は、それが生の必須の重要な事件とむすびついた、途方もない進化の時間に関するものであるからこそ、われわれの日常にきわめて根強い勢力をふるい、驚くほど広範囲な作用をおよぼしている。たとえば、個人が脅迫一般に対して非常に無力であることや、予知、予見、予言といった能力に対する、あるいは超自然的な能力に対する執ような願望、幻影、幻想、幻覚の頻出と、そのようなものに対する過大評価、何ら具体的証明をもたない原点、原像、原型といった「原」のつくものをつくり出したがること（この意味でも《原不安》はまずいのだが）、多種多様な集団的陶酔の現象等々はその実例である。

池井望の論にしたがえば、現代人が抱く不安と幕末期の民衆の不安の間には、人間の生得的な不安＝《原不安》として通じる部分があり、また、そうした《原不安》が幕末期の民衆を「ええじゃないか」へと導いたと言える。当然のことながら現代と幕末では大きく時代背景が異なり、人々が抱く不安の具体的な内容に相当の隔たりがあるのは明らかである。しかし、池井望の言う《原不安》に注目し、現代の状況をかつての「ええじゃないか」と結びつけて考えてもこじつけにはならないだろう。

また、恐怖と笑いに関して山口昌男は「笑いというのは、人間が衝動的に、たとえば病気でも、けがでもなんでもいいですけど、その瞬間に出会う不意の出来事に対する根本的な恐怖を鎮める働きがある（山口 1984：6）」と述べ、論を展開している。以下、引用する（前掲書：6－7）。

恐怖というのは、外からやってくるばかりでなくて、自分の内側からやってくることもあると思うんです。ですから、根本的な恐怖感を押さえるもっとも有効な手段というものとして笑いがあるということは、いろんな文化の儀礼をみていると

ね、よく説明されるのですが、たとえば、ギリシャのバルボーという女神が、恐怖感、怪物をとりこむために、征服するために、自分のセックスをみせたというふうなことが思いだされます。

こうした行為の中にみられることは、まず、わけのわからない恐怖を押さえるためには、そういうふうな笑いに結び付くような行為、とんでもない行為が出てくるということです。日本でも、『古事記』とか神話の中で、天照大神が岩戸隠れをしようとする。まっ暗になって、もうあらゆるちみもうりょうとか、混沌とかそういうものが支配してきて、恐怖におそわれたときに天鈿女命アメノウズノミコトはセックスをあらわにした踊りをすると、それで、神々は笑って、そこでその笑いがきっかけとなって岩戸が開かれるというふうな儀礼の中に現れています。

「ええじゃないか」において、民衆たちはお互いの異形な格好を笑い合い、猥雑な唄を唄うことで、心の内に広がる恐怖を払拭しようとしたのかもしれない。そして現代においても、同じ原理が働いていると考えられるのではない。しかしながら現代人は、近代合理主義的な考え方を捨て去ることはできない。かつての「ええじゃないか」のように全てを忘れ、「笑いの世界」に身を投じることは容易ではない。そして近代合理主義の枠組みから抜けられない現代だからこそ、無意識の内に「ええじゃないか」の笑いに憧れのような気持ちを抱き、魅力を感じているのかもしれない。

(3) 現代における「ええじゃないか」のイメージと全民衆性

これまで、現代に表現された「ええじゃないか」の具体例について考察してきた。それぞれ「ええじゃないか」の表現に違いは見られるが、そのイメージで最も典型的と言えるのが、「ええじゃないか」で民衆たちが日常を忘れて唄い、踊り、「狂乱」に興じたというイメージである。このイメージは世間一般に広がっていると思われるイメージでとにかく陽気で楽しいものである。

続いて、「ええじゃないか」の大前提について述べる。それは、「ええじゃないか」が決して一個人で成り立つものではなく、民衆たちみんなによるものであるということである。先述の「ええじゃないか」の陽気なイメージも決して

一人でではなく、みんなで「お祭り騒ぎ」を楽しむというものである。「ええじゃないか」の参加者は、民衆全般であり、その参加者たちに階級は存在しない。「ええじゃないか」において、混乱に乗じて民衆たちを煽動した者はいたであろうが、明確な指導者はいなかった。しかし、指導者がおらず、民衆たちが具体的で実利的な目的を持たなかったからこそ、ターナーが「コミュニティ」と呼んだ無秩序な世界で打ち解けた人間関係の中、民衆たちの笑いが昇華したと言えるのであろう。

第3章で取り上げたバフチンのカーニバルの笑い論においてもカーニバルは全民衆的なものであると述べられている(バフチン1988:17-18)が、「ええじゃないか」を民衆たちの笑いとして捉えた時、日本人の笑いに関する特性から「ええじゃないか」の全民衆性について見えてくるものがある。

日本人の笑いについて大島希巳江は以下のように述べている(大島:2006-109)。

日本人は何をどのように笑うのか。それについて述べる前に、日本人では冗談を言い合って笑い合える関係がすでにあることが、前提として重要である。何の人間関係も持たない者同士が、突然冗談を言い合って笑い合うという状況はきわめて珍しい。しかし、多民族社会においては初対面で最初に交わす言葉がユーモラスであったり、ジョークを交えた自己紹介であったりすることは珍しくない。私たちの日常では笑いを使って初対面の人との距離を縮めるという方法はあまり主流ではなく、笑い合える関係であるということがよい人間関係の指標となっている。その親密さが「内輪うけ」のような、ある程度事情を知っている人同士にしか通じない笑いに象徴される。

大島希巳江の論から、日本人は他の民族に比べて笑いの持つ、人と人を結びつける力、求心力により強い影響を持つと考えられる。そして、共に笑い合える関係=親密な関係という傾向があると言えるだろう。

日本人の笑いに関して、宇井無愁は「本来笑いは『笑い手』と『笑われ手』の間に起こった(宇井1969:15)」と述べ、落語や漫才といった笑いの芸にお

いて、笑い手と笑われ手の間に仲間意識をつくり出すことが重要であると論じている。以下、引用する（前掲書：19 - 20）。

たいがいの演芸は、こういった笑わせ手と笑い手の「対話」で成り立ってきたので、笑わせ手は客の階層や年齢や職業、または演芸場の広さに応じて、笑いの寸法をコントロールすることを、経験により学んできた。それが仲間意識をつくり出すための条件だった。（略）

大量生産・大量消費の経済成長というみせかけの繁栄のなかで、日本人は多くの貴重なものを失いつつあるが、笑いもその一つといえる。

宇井無愁は続けて、「笑いの価値判断を狂わせている原因は、笑い手の心に『ゆとり』がないからだろう。良質な笑いは『心のゆとり』から生まれる。『心のゆとり』が仲間意識をつくり出し、相互コミュニケーションを緊密にする（前掲書：20）」と述べている。心に「ゆとり」を失い、人間関係が希薄になっていると言われて久しい現代日本において、民衆たちが入り乱れ、ふれあい、共に笑い合う「ええじゃないか」に人々が魅力を感じても何ら不思議はないのではないか。

おわりに

私は、人は笑うために生まれて来ると考えている。笑うことは人間だけに与えられた特権であり、笑いながら生きることは人間らしく生きることであると言える。それ故に笑いは人間性と深い関係があると考えられる。

幕末という日本史上最も大きな時代の転換期において、ターナーの言う「コミュニティ」のような特異な世界の中で民衆たちの笑いは昇華した。笑いは人と人とのつながりを強くし、「生まれ変わりたい」という人間の根源的な欲求を露わにし、みんなで明るい未来を希求した。これらは必ずしも客観的な根拠に基づくものではないかもしれないが、「ええじゃないか」の本質はやはり民衆たちが唄い、踊り、そして、みんなで笑い合ったことであると筆者は考える。

「ええじゃないか」は時代によって変わることはない、人間の本質に結びついた笑いであるからこそ、言い知れぬ不安が漂う現代日本において、人々に魅力を感じさせると言えるのではないだろうか。

注

- 1 注目すべきは、その（「ええじゃないか」の）囃子言葉の中に「世直し」あるいは「世直り」の言葉が含まれていたことである。それは今のところ、金谷宿・京都・阿波・淡路・伊豆三島などで検証されている。このことは、この運動の主体が、全国的に「世直し」「世直り」を唱えたことを示しているといつてよい。だから、この運動の総体は、当時の人々に、広島でも江戸でも「世直し踊」「世直り踊」であるにとらえられ、記録されているのである（佐々木1979:98）
- 2 THE イナズマ戦隊 アルバム「為さぬは成らぬⅢ枚目」収録「ええじゃないか音頭～ズッコケ中一編～」2005年
松井誠 マキシシングル「ええじゃないか」2006年
レキシ アルバム「レキシ」収録曲「ええじゃないか」2007年
赤犬 アルバム「あか犬」収録曲「ええじゃないか」2007年

参考文献

- 池井望 1985「遊びとしての宗教・儀礼・神話」 仲村祥一・中野収編『大衆の文化 日常生活の心情をさぐる』211 - 236 頁
- 伊藤忠士 1995『「ええじゃないか」と近世社会』 校倉書房
- 宇井無愁 1969『日本人の笑い』 角川選書
- 大島希巳江 2006『日本の笑いと言世界のユーモア 異文化コミュニケーションの観点から』 世界思想社
- 佐々木潤之介 1979『世直し』 岩波新書
- 宗田理 2005『ええじゃないか17歳のチャレンジ』 角川書店
- ターナー、ヴィクター W. 1981『象徴と社会』 梶原景昭訳 文化人類学叢書
- 高木俊輔 1979『ええじゃないか』 教育社
- 田村貞雄 1987「ええじゃないか始まる」 青木書店
- 遠山茂樹 1974「近世民衆心理の一面—「おかげ参り」より「ええじゃないか」へ—」 山田忠雄編『農民闘争史』 校倉書房 255 - 267 頁
- ノーマン、ハーバート E. 1986『クリオの顔』 大窪愿二編訳 岩波書店
- バフチン、ミハイル 1988『フランソワ・ラブレーの作品とルネッサンスの民衆文化』

川端香男里訳 せりか書房

ヘネップ、ファン A. 1977 『通過儀礼』 綾部常雄・裕子訳 弘文堂

藤谷俊雄 1968 『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』 岩波書店

森下伸也 2003 『もっと笑うためのユーモア入門』 新曜社

矢野芳子 1981 『「おかげまいり」と『ええじゃないか』』 青木美智男〔ほか〕編 『生活・文化・思想』 東京出版会 317 - 357 頁

山口昌男 1984 『笑いと逸脱』 筑摩書房

山口昌男 1986 『文化人類学の視角』 岩波書店

山口昌男 1993 『道化の民俗学』 ちくま芸文庫

Leach, Edmund 1976 *Culture and communication* Cambridge University Press

参考資料

「ええじゃないか」 1981 今村昌平 / 監督 宮本研 / 脚本 松竹他

「ええじゃないか豊橋 豊橋まつり ガイドブック」 豊橋まつり振興会